

聖書宣教会通信

〒205-0017 東京都羽村市羽西2-9-3 Tel 042(554)1710 Fax 042(554)5562 振替・00150-6-34971

巻頭言

『主の口から出るもの』申命記8章2～3節

聖書神学舎名誉教授 後藤茂光
 泉キリスト教会協力牧師

聖書神学舎が創立され、今年の5月で50周年を迎えたということになります。舟喜順一先生、羽鳥明先生をはじめ、直接、この働きに参加して下さった方々、また長年にわたり背後にあって熱い祈りをささげ、多くの犠牲を払って献金をささげて下さった諸教会の兄弟姉妹たちに改めて感謝すると共に、神さまの深い憐れみと大きな恵みに感謝し、背後にある主の御旨とご期待を確信し、御名を崇めたく存じます。

時代は変わりました。世の中は今も、目まぐるしく変動しています。今の世の中は50年前と較べて違うところが何と多くあることでしょう！でも、聖書神学舎が発足した時代と、50年後の今の時代に共通している問題があります。

それは福音派が拠って立つべき「聖書信仰」という土台が脅かされ、いわゆる福音派の教会の中で聖書信仰が揺らいでいるという問題です。

ですから、神さまは聖書信仰にしっかり立っている聖書宣教会を続けて存続せしめようと思し召しているのです。この時代にこの国において、聖書宣教会（聖書神学舎）の働きが必要であるので、幾多の危機を乗り越えさせ、50周年の今日まで神さまが存続させてくださり、これからもお用いくださろうとしておられるのだと確信しているのです。

さて、申命記8章3節に「人は主の口から出るすべてのもので生きる。」アル・コル・モツァフィ・アドナイ イフイエ ハアダムと記されています。

旧約聖書ヘブル語大辞典は、モツァに民数記30:13、申命記8:3などの例を挙げて、「出てくること」「現れること」という意味（訳語）を示していますが、「口から出るもの」（モツァフィ・、モツァセファテ・）は、「口から出る



こと」と「口から出ることば」を指していると考えてよいのではないのでしょうか。起源的には、はじめに「こと」があって、その「こと」を意味する（指示する）「ことば」「ことのは」が口から出てくると考えられます。

新改訳聖書マタイ4章4節によれば、イエスさまも「神の口から出る一つ一つのことばによる」と書いてある」と仰せになりました。新改訳聖書がここで「ことば」と訳しているギリシャ語はレーマですが、このレーマもまた、「ことば」、「事がら」、「こと」を指して用いられていますから、新改訳聖書の申命記8章3節と全く同じように訳すことも出来るでしょう。

神が、みことばによって人を生かして下さるのです。キリストは、荒野で、申命記に書かれたみことばを引用してサタンの誘惑をしりぞけ、勝利を得られました。

神さまは、この終末の世にある私たちに「書かれたみことば」である聖書を与えておられ、御霊さまによって親しく「みことば」を語りかけ、その一つ一つのみことばによって私たちに生かして下さるのです。

聖書のみことばをじっくり学び、宣教の熱心をもって主のみことばを宣べ伝える奉仕者がさらに多く、この学舎から送り出されることを切に祈っています。

聖書神学舎本科のカリキュラム

聖書神学舎教師会議長 津村俊夫

この度、「モリヤ問題」を契機として聖書神学舎存在の原点を確認する中で、聖書神学舎ならではの神学教育カリキュラムがどのようなものであるべきなのかを、教師会はここ数年間、時間をかけて検討して来ました。

日本の教会をとりまく霊的状况や神学的実践が混迷を来しているようにも見える現代において、「人のことばで書かれた神のことば」である聖書が「誤りのない」唯一の権威であることを信じ告白する「聖書信仰」を堅持する神学校としての使命が、聖書神学舎には今もあることを再確認することができました。相対主義の世の中にあって、何が真理であるのかを明言することを避ける傾向を、私たち自らが持ち合わせていることへの反省から、もう一度、今こそ聖書そのものの主張に謙虚に耳を傾けるべきであると考えています。福音主義に立つ私たちが、とすれば、「聖書が教会を生み出した」ことを忘れてしまって、「教会が聖書を生み出した」かのように考えてしまうことがあるのではないかと思うからです。

そのために、聖書のギリシャ語・ヘブル語原典に帰って行かなければならないと私たちは確信します。それは、翻訳聖書が十分でないからと言うことではなく、自らの聖書理解が独りよがりになっていないか、自分中心になっていないか、「聖書について」の他の人の意見に振り回されて、「聖書から」直接聴くことを止めてしまっていないか、理性や体験や伝統よりも、聖書そのものからいつも新鮮に学び続けているかを自己吟味することが必要だと思うからです。みこ

とばによる養いをもって他の人々に仕える立場に立つべく召されている者たちは、特に、それが必要だと思います。

3年・4年の短い期間に、神学校で牧会上の全てのことに対応できるような実践的訓練を施すことは不可能でしょう。私たちは、神学校でなければ受けることの出来ない基礎的な訓練を体得しておくことが、卒業後の息の長い奉仕の生涯の土台作りになるとの確信から、新カリキュラムでは、本来の聖書神学舎が目指してきた「積義から説教へ」という神学教育を、従来よりも更に丁寧にじっくりと時間をかけて学ぶことが出来るようにと軌道修正しています。これは、現行カリキュラムと新カリキュラムとの履修単位の配分を比べる時に明らかとなります。

その特徴としては、実践的な教会の牧会上の多様な課題を意識しながらも、まずは聖書から基礎的なことをしっかり学んでおくことが土台となっています。

(詳しくは、要覧やウェブサイトをご覧ください。)

課程	旧約学	新約学	組織神学	歴史神学	実践神学	その他	合計
現3年	25(2)	20(2)	16	6	28(8)	10(2)	105(14)
現4年	29(8)	22(6)	19	12(1)	30(14)	10(2)	122(31)
新3年	29	24	22	9	25(10)	8(2)	117(12)
新4年	41	32	23	9	29(14)	8(2)	142(16)

[但し、()内は選択科目単位]

私たち教師も研修生も、みことばを語る前に、まず自らがみことばをよく学び、みことばの権威の下にへりくだって、主にお仕えして行くことを第一の願いとし、みことばに基づいた信仰の実践を自らの「生き方」においてあかしして行くことが出来るようにと願って励みたいと思います。

祈ってくださる皆さまに心から感謝しつつ、近況と祈りの課題をお届けします。

- 後期が始まり、1年生は新たにヘブル語に、4年生はさらに卒論に、等、それぞれの学年の学びに熱心に向かっています。研修生の学びと訓練のために引き続きお祈りください。
- 新年度体制に向けて、人事、設備など、主の御名があがめられる最善の備えをさせていただけますように。
- 献身者が起こされ、聖書神学舎への入会希望者が、主のみこころのとおり導かれますように。

聖書神学舎創立 50 周年記念礼拝のご報告



10月17日に、聖書神学舎の50年の歩みを記念する礼拝をささげました。特別な案内はいたしませんでしたが、第一期の卒業生3名など90名ほどがお集まりくださいました。元教師会議長の後藤茂光先生の力強い説教に、一同、主の前に大切な確認をさせていただきました。また、創立者の羽鳥明先生と舟喜順一先生にも、それぞれご夫妻でご出席いただき、ご挨拶をしていただくことができ、心から主に感謝しました。

出席者の声とともに、ここにご報告します。



50周年記念礼拝を、学舎の土台を据えられた先生方と共に捧げることができ、幸いでした。スライドに登場する恩師のお姿を拝見しながら、聖書神学舎の教育はやはり「人」なのだと思います。今日テレビやゲームに加え、人のつながりもネットや携帯が媒介するバーチャル・リアリティの世界が広がっていますが、福音宣教や教会形成は生身の人間と関わるリアリティの世界です。人の心を解し、人の心に届く人材、個性豊かで懐の深い器がどうしたら育てられるのか。牧会に戻った私は、改めて考えさせられたひと時でした。

(内田和彦 教師、前橋初小教会牧師)

私は卒業生ではありませんが、親子二代で評議員を務めています。記念礼拝の説教者の後藤先生にはTCCで実践神学を習い、懐かしく思いました。当時両校は兼務の先生がたがおられ、ホーク学長、綾部先生、舟喜順一先生にも習いましたので、思い出を共有できました。また世田谷中央教会には数多くの方々も奉仕神学生として来ておられました。浜田山時代には節約のために自転車を通い、教会向かいのパン屋さんからパンの耳を求めて帰った方々もある、そんなことを思い出しながら席に着いておりました。神学舎らしく、華やかさを抑えた集いと感じました。

(安藤能成 評議員、世田谷中央教会牧師)



記念礼拝に参加させていただき、創立者の舟喜順一先生、羽鳥明先生をはじめ、歴代卒業生の諸先生方と礼拝を共にできたことは感謝でした。そして何よりも、聖書信仰をもっとも大切に歩んできた聖書神学舎の歴史が、ただ主の許しの下、主の守りの中にあつたということを確認できたことは、私にとっても意義深いことでした。主の御名をほめたたえます。私もキリストを礎として、みことばに従い、そこに生きる一人のしもべとして、生涯を歩ませていただきたいと、この記念の年に献身の思いを新たにされました。

(芳田秀貴 本科研修生3年)

創立50周年記念の日に教会音楽舎卒業生として立ち会う事が許されました幸いを感謝します。聖書神学舎の創立は、「みことばに仕えるための音楽」「音楽がみことばに沿ったものとされて行くため」の教会音楽舎(科)の「礎」であった事を改めて確信しました。みことばに立ち返らなければ教会の音楽は逸れます。卒業生として、尊くかけがえのない学びに加えて頂いた事の恵みとあわれみを今一度感謝し、誇りとし、与えられた場で仕えて行きたいと願います。これからも御心になつた学び舎として広く用いられますようお祈りします。

(須田栄子 教会音楽舎卒業生、本庄初小教会)

<訂正> 前号(134号)の「モリヤ問題」報告の一部に誤った記載がありましたので、次のように訂正致します。「貸付額7000万円の約三分の一は…」(6行目)は、正確には「貸付額7000万円に対して約6090万円が回収され、その回収額の約三分の一は…」ということです。誤解を与えたことをお詫び致します。(鞭木)

編集後記 世界の変化が加速し、「予測」や「計画」が困難のように思える中でも、主の摂理を信じて生き

ることのできる者の幸いを感謝します。皆さまの歩みの上に、主のご支配が豊かにありますように。(A)